

事業名称	住まいと暮らし—その変化をたどる—
団体名・代表者	香寺歴史研究会 会長 竹尾 元一
協働の相手方	企画政策室、香呂地区連合自治会

目的	昨年度まとめた『ふるさとマップ集』に描かれた村人の住まいと暮らしの様子をなんとか記録に残せないかと考えた。昭和30年代はまだ戦前の農家の住まいと暮らしが色濃く残っていたが、一方高度経済成長の波を受けて社会も暮らしも大きな転換期を迎えようとしていた。こうした時期の記録を残すことは、次の世代の人たちへ地域社会の変動と暮らしの変化を伝えることとなり、これからの地域づくりを考える資料ともなると考えている。
内容	1. 各地区で家のかたちとその変化を聞き取りと観察で明らかにした。 2. かつての間取りや屋敷の様子を復元し、見て分かるように「間取り図」「屋敷図」として表現した。 3. 聞き取りと回想をまとめた『香寺町 昭和30年代住まいと暮らし』を発行する。
事業経過	住まいと暮らし調査説明会を開いて、目的や方法について説明する。先例がなく手探りであったが、説明者が見本として自宅の間取り図と屋敷図を示して具体的に描き方を説明する。住まいと暮らしの変化については指標となる項目を挙げて具体的に思い出してもらうようにした。間取り図・屋敷図は描くのに苦労されたようだが、趣のある手描き図があり、パソコン駆使の図もありと変化に富んでいた。各地区では回想記を集めたり、聞き取りをしたりして、内容が豊かになっていった。内容には当然、共通した事項も多いが細部になると興味深い事実も多く読みとれた。こうして集まった間取り図等と聞き取り調査表に加えて編集担当者が調査表から読みとった内容をまとめとして加えて最終的な報告書とした。『昭和30年代 香寺町の住まいと暮らし』として刊行し、今後活用されることを期待している。
事業の効果	1. 暮らしが地域社会と結び付いていることが確認できた。 2. 忘れられようとしていた住まいと暮らしの原風景を記録にとどめることができた。 3. 『昭和30年代 香寺町のふるさとマップ集』にまとめることで、後世に残せる資料となった。
今後の展望	身近な住まいと暮らしについて世代を超えて話し合い、かつての暮らし方を振り返って、薄れつつある地域社会と家庭とのつながりを考える一つのきっかけになればと考えている。ことに、若い世代にはこの記録から家庭の中にも歴史があり、社会と共に変化してきたことを知って、これからの自分たちの暮らし方の問題として考えてほしい。世代を越えて家と村の過去と未来を話し合えることになればと思っている。小中学校とは地域調べに活用されふるさと再発見となるよう連携していきたい、と考えている。

【実施団体の事業総括・感想等】

<p>ここ数十年で地域の生業も暮らしもそして景観も大きく変貌した。住まいと暮らしの変化は最も身近な歴史である。われわれ世代は快適で住みよい暮らしをひたすら求めてきたが、大事なものも捨て去ってきたのではないかと恐れている。</p>
--

【協働の相手となった所管課の感想等】 ※実施団体は記入しないでください

<p>地域の魅力を次の世代に繋いでいくことは重要であるが、その手法はさまざまなアプローチが考えられる。その中で、地域の歴史を若い世代に認識してもらうために、昭和からの身近な「生活」というソフト面に焦点を当てたのはよい取組であったと思う。今回、各自治会に細やかな聞き取りを行い、間取り図や屋敷図を取り入れて、生活の変化を記録した冊子を作られ、郷土資料としても価値の高いものである。この時代のくらしを経験したことのない小中学校の子どもたちが、具体的に当時のくらしの風景を想像できるように、さらに伝え方を工夫しながら伝承してほしい。</p>
